

## 《巻頭言》

# 松陰の攘夷論とグローバリズム



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

過日、山口県萩市にある吉田松陰が主宰した松下村塾を見学した。今回で8回目である。ここを含め「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産への登録が追い風となっているようで、市内は大勢の人々で賑わっていた。

松下村塾は木造瓦葺き平屋建て、2室18畳の粗末な小屋である。創設したのは松陰の叔父に当たる玉本文之進で、その後、松陰が引き継いだ。松陰による松下村塾での指導期間は僅か2年4ヵ月足らずであったが、この間に入出入りした門下生は80名前後に上る。

久坂玄瑞 高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋……。その多くが松陰の志を継いで、幕末における種々の動乱に身を投じて明治維新の礎となり、近代日本の建設に奔走した。

勅許なく幕府が日米修好通商条約を結んだことに激怒し、老中の間部詮勝の暗殺を企て捕らえたことから、松陰は一般に過激な攘夷論者というイメージが強い。だが、松陰は決して排外主義的な攘夷論者ではなかった。現実を直視し、空理空論を嫌うリアリストだった。

少年期には日本における地理学の祖たる箕作省吾が著した『坤輿図説』を始めとする世界地理書を熟読し、兵学師範として西洋兵学を学ぶため九州遊学に出て、異国に開かれた平戸では海外事情に関する書物を読み漁り、西洋

の反射炉（金属溶解炉）の研究に没頭したこともあった。1854年3月には西洋見聞のため下田沖に投錨していたペリー艦隊へ乗り込み、アメリカへの密航まで試みた。

松陰は『対策一道』の中で、鎖国は「坐して以て敵を待」ち「勢屈し力縮みて、亡をか待つ」ものであり、「苟偷の計にして末世の弊政なり」と断じている。幕府の態度は外圧によって開国を凶るという姑息なもので、これでは徐々に日本は西洋の奴隷と化し、結果として自滅すると警告しているのである。相手の言いなりになることだけは断じてしてはならない。だからと言って徒に相手を打つことだけを考えるのではなく、相手の力を跳ね返すため、「航海通市」、言わば交易を通じて、逆に「敵」から学べるものは徹底して学び取り、国力増進に努め、西欧諸国と対等で競争関係にある国を目指すべきと論じた。

それでも日米修好通商条約を批判したのは、アメリカの目論見は「宇内を合して一となさんと欲す」（『講孟余話』）、即ち世界中に西欧流のルールを強要するものと見ていたためである。現代のグローバリズムに相通じる先見性を感じさせる。

時代の潮流は恰も国境なきが如くボーダレス化が進行している。松陰の攘夷論は頗る今日的テーマでもあると言えよう。